

## 保育環境について考える (2)

原口 純子

### 〈保育環境の複合性〉

先の号で、保育室の室内環境の貧弱さについて述べ、具体的な幾つかのおもちゃについて述べてみましたが、物があれば幼児は遊べるかという点、無いよりはるがあるほうが良いのですが、そう単純なものでもないのです。

幼児が充実した経験をするためには、環境が、物（遊具の選定）、園の教師の人間関係、幼児の人間関係、教師の意欲や適性、園の建物の構造、その他

もろもろの物が複雑に入り組んでいる複合的な、あるいは総合的なものなのです。

幼児が物を使って遊ぶということについて、新しい遊具を出し、それがどのように定着したかを一輪車（ユニサイクル）の事例を通して考えてみます。

### 〈一輪車が育つ環境〉

近くに児童館があり、ホールに一輪車が備え付けられています。そこで、小学生と一緒に遊ばせて幼児



▲児童館のホールで、一輪車で遊ぶ

数名が一生懸命練習している様子を見て、一輪車が幼児にも十分楽しめる遊びであることを知りました。

そこで、異動した新しい幼稚園で三台購入して、年長五歳児の部屋の前のホールに出してみました。担任の先生には「五歳で練習すれば乗れるようになる

るので遊んでみて欲しい」と伝えたのですが、担任の先生は興味が持てず、ほとんどかわりませんでした。幼児もホールに置いてある一輪車にさわったり、練習する様子も見られませんでした。そのうち蹴っ飛ばされていたり、サドルがこわれたりして、保育室の倉庫に片付けられてしまいました。

次の年は教諭の異動があり、新しく来た先生が倉庫の一輪車を見付け、「私は一輪車は乗れませんので、児童館に練習に行かせて下さい」と言って、降園後、他の年長の先生二人をさそって出かけ、大人用の一輪車で練習してきました。もちろん、とうてい乗れるようにはなりませんでしたが、雰囲気だけはつかめたようです。翌日保育室の前のホールに一輪車を出して股がっていると、幼児の人だからがして、「私もしたい」とか、「貸して貸して」とよってきて、近くについている、手すりにすがりついて練習を始めました。職員室がそばにあるため、職員が出入りする度に、目をかけ声をかけて励ましたり、

手伝わたりしているうちに、夏休み前に四人程の女兒が何とか乗れるようになりました。他にも数名の幼児が代わりあって練習をして、夏休み中に家庭で買ってもらって練習した幼児も加えて、秋には二〇名位の幼児が乗れるようになりました。運動会の表現の中に取り入れ父母に見てもらいました。

この事例から環境ということについて幾つかのことがわかりました。

## 1 教具、教材、備品の選択

どのような備品や教材、教具を備えるか、とすることは、どのような遊びや経験を持たせたいか、と言うことです。それは、園長でも教諭でも保育に当たる者が、保育のイメージやビジョンを持つことであり、その表現のために広く様々な情報をつかむことは大切なことです。

新聞、本、雑誌、論文、保育学会、教材カタログ、その他のカタログ、テレビ、講演会、公開講

座、演劇、音楽会、語りの同好会、保育について話しあえる友人、デパートのディスプレイ、小学校低学年の教育課程、児童館の子どもの遊び、子どもパレエ教室の発表会に至るまで、あらゆる情報をアンテナを高くしてキャッチし保育の場に生かせるヒントを蓄えることが、幼児の生活環境を豊かにし、可能性を広げる意味でも大切です。特に園長は園舎の工事予算や備品購入を司るのであれば、なおさら園をどうしたいのか、幼児にどのような経験を持たせたいのかのビジョンを描けることは大切なことだと思います。

さて、この事例では一輪車を出してみました。もちろん、幼児が一輪車に是非とも乗れなければならぬものではありません。けれども、ちょっと努力するとできるようになるものは幼児の意欲を高め、自信や成就感をもたらします。できないからといって劣等感を持つというほどのものでもありません。一輪車自体は年長の幼児に適した遊びだったと思

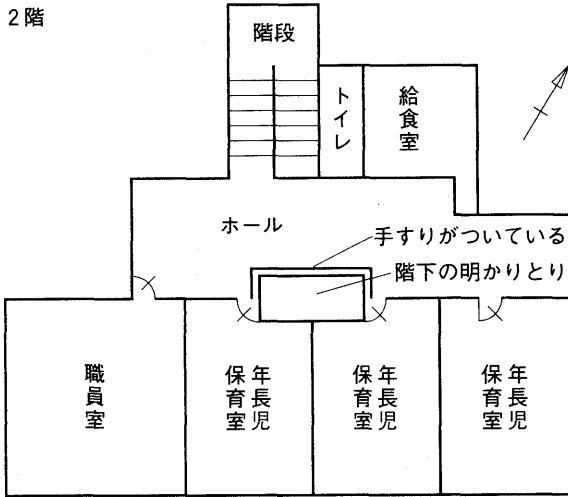
ます。

## 2 職場のチームワークと先生の意欲

園長がどんなに張り切って設備や施設を整えても、クラスを持つ先生や主任と園長の気持ちがよく通じ、人間関係がうまくいってなければ、素晴らしい方針も、良い備品も幼児の目の前にあってすら役に立たないことがわかります。公立の幼稚園は異動が激しく、前任の園長で安定していたところに、異動で新しい園長を迎えると、大体一年間は何もできないのです。信頼関係が育っていないところで、新しい園長が一輪車などを買ったので、一斉に「できるわけないわよ」という否定的な、反発する気持ちになったのかもしれない。新しい物を入れる時期を見誤ったともいえます。一輪車三台はしばらくホールに出してあったのですが、結局その年は役に立ちませんでした。園内の人間関係がどんなに大切な「保育環境」であるかがわかります。

次の年、主任や教諭の大幅な入れ替えがあつて、新しい体制になりました。この年は大きな研究会を控えた年でしたが、主任の先生を中心に大変まともりの良い年でした。年長担任のM先生は小さな事にこだわらず前向きで、意欲いっぱい先生です。一輪車を見付けて、乗ったことはないけれども幼児に出す前に自分でやってみようと思つたようです。この教師の意欲が幼児を引きつけています。教師はとも大切な環境です。小さな一輪車に股が、手すりにしがみついているM先生のまわりに幼児がいっぱいむらがつて「なにしてるの」「つぎ貸して」と大きわぎ、幼児に貸し与えて、手をとってやったり、車が逃げないようにおさえたりしているうちに、幼児は意欲をかきたてられたようです。教師の資質にはいろいろあり、みなそれぞれの良さを持っているのですが、幼児教育に携わる者として、好奇心のある、意欲に満ち溢れた先生の存在こそ、なにも増して、大切な保育環境です。

◀園舎見とり図



ともあれ、M先生の出現で、捨てられそうになつた一輪車も命を与えられ、これのために早く登園したがるという幼児の話を父母から聞きました。

### 3 一輪車による構造的環境

物があつて意欲的な教師がいれば幼児はよい経験が持てるかと言へば必ずしもそれだけではないようです。それぞれの遊びにはその遊びに適した構造的環境があります。例えば、同じ砂場でも水道がそばにある場合とはるか離れてある場合とは幼児の遊びも経験する内容も違ってきます。

さて、一輪車に適した園舎の構造とは何でしょうか。本園の場合、一輪車を固定する壁と、つかまる手すりがあったこと、その高さや長さがちょうど良い具合でしたので、人手を煩わすことなく自分で取り組めたことでした。また、三台の一輪車が動き回って危険のない広さがあり、友だち同士一緒にする楽しさや、競争意識を持つにも適当でした。

▶吹きぬけの手すりを使って練習



もう一つの条件は教師や大人の目が届くことです。一輪車は少くらしい練習したからと言って簡単に乗れるわけではありません。かなり長い間、ぐらぐらとバランスもとれず苦労しているのです。練習する場所がクラスの目の前で、職員室のそばであったことが幸いしていました。友だちや先生がしょっしゅう見えてくれているし、職員室の園長や主任、給食のおばさん、みんなが通りかかる度に「がんばっているね」「もうすこしね」「上手に乗れるようになったのね」と声をかけたり、手を貸したりすることが励みになっていたようです。

友だち同士競い合い励ましあうことがエネルギーを呼び、いつでも誰かが練習していました。これが、もしいくら手すりがあっても、車を止める壁があったとしても、誰からも見えない外などに置いてあったら、とても粘り強く練習しつづけることはむずかしかったと思います。

その後私は他の園に異動し、一輪車ができないも

のかとまわりを見回すのですが、適当なつかまる手すりもないし、大きなガラス戸があったり、職員が目がとどく安全な広場もないのです。園舎の構造や設備によって幼児に経験させられる遊びの種類は制限されるのです。

#### 4 自己主張できること

おしまいに環境にかかわる幼児の側に目を転じましょう。

年間を通してかなりの幼児が乗れるようになりましたが、男児はほんの少いで、大半は女児です。一輪車を初めに上達する幼児を見ると、運動神経の良い幼児とは限らないのです。むしろ「貸して」「つぎ、わたし」と自己主張して、一輪車を回数多く確保して練習できる幼児であることがわかりました。男児は一見強そうにふるまっていますが、実質的に自己を主張し、強引に物を確保しているのは、女児なのかもしれません。

保育の場は生存競争の世界で、環境に主体的にかかわるといふことがいわれますが、教師はよほど注意深く幼児を見ていないと、気の弱い幼児はやりたない経験もできずに、くやしい思いや、割り切れない思いをたくさんしているかもしれないのです。

\*

一輪車も始める時には始動エネルギーとしてかなり力がかかりましたが、二階の年長児が一輪車に乗っているのをうらやましく、尊敬をこめて見ていた年少児は年長になるとすぐに一輪車にとびついて練習するようになり、年長児の当たり前前の遊びの一つに定着しました。一人遊びのように見える一輪車も仲間の励ましや、譲り合い、取り合いのけんか、友だちが乗れるようになったことを共に喜ぶ等、たくさんの心の経験をさせてくれました。

(茨城県公立幼稚園)